

課題別研修

－不登校防止パッケージ H28事例－

不登校事例（小学校）

1 A男（4年生）は勉強も運動も前向きに頑張り、学級の仕事にもイヤな顔をすることなく積極的に
2 取り組み、同級生から信頼されている児童の一人である。家庭は、父親が単身赴任のため、日頃はフ
3 ルタイムで仕事をする母親と弟（2年生）と3人で生活していた。そのため、A男は帰宅後、母親に
4 代わって放課後児童クラブに弟を迎えに行くなど、家庭の手伝いもする児童であった。

5 ある水曜日、帰宅していたA男は母親からの連絡を受け、弟を迎えに行った。すると、校門付近で
6 普段からトラブルの多い5年生のB男に怒鳴られている弟を見つけた。近寄ってみると弟はおびえた
7 様子で泣いていた。B男はA男にも「お前がこいつの兄ちゃんか？こいつ、俺が声をかけたのに返事
8 もできねえのかよ。」と怒声を浴びせてきた。ほどなく、騒ぎに気付いた児童クラブの指導員が様子
9 に気付いてその場を収めたが、二人は不安を抱えたまま帰路についた。

10 指導員はこの件を学校に報告し、学校では情報の共有が図られた。早速、A男の担任のC教諭が自
11 宅に電話してA男に状況を確認した。そして、弟の担任のD教諭と共に、B男の担任のE教諭に報告
12 し、次の日の対応について次の事を確認をした。

- 13 ・登校時に校門で出迎え、一日厳重に見守りをする。
- 14 ・E教諭はB男の話を聞き、指導する。

15 次の日、朝7時30分頃、A男の母親からC教諭に電話が入り「子供たちが学校には行きたくない
16 と言っています。学校で何かあったのでしょうか？」と尋ねられた。C教諭は昨日の出来事を伝え、
17 学校の対応を伝えたが、母親は学校からも子供たちからも事前に話を聞いていなかったため、不安が
18 高まり、結局、この日は欠席させることにした。

19 放課後、C教諭とD教諭は家庭訪問をしてA男と弟と母親の不安感を和らげ、A男と弟が安心して
20 登校できるよう学校の対応を説明したが、母親は「B男の謝罪がない限り安心できない。」と言い、
21 二人も「謝られても怖くて学校には行けない。」と訴えた。

22 家庭訪問の後、二人の教諭は帰校しA男と弟、母親の様子や思いを、それぞれの学年主任と生徒指
23 導担当、管理職に伝えて状況の共有を図った。管理職は報告が遅いことと、水曜日に母親に連絡がで
24 きていなかったことを指摘するとともに、この件を「いじめを背景とした不登校の兆候」と捉え、生
25 徒指導委員会を開いて、具体的な支援策を協議するよう指示をした。

26 協議の結果、次のことを確認した。

- 27
- 28 ・A男と弟が不安であれば相談室で過ごすこともできる体制を整えること。
- 29 ・E教諭はB男の言い分を聞いた上で、起こした出来事と、A男と弟の気持ちを考えさせ、今後の言
30 動について改めるよう指導すること。
- 31 ・継続的に家庭訪問を行い、母親の理解と協力を得ながら児童の話を聴くこと。
- 32 ・学校で安心して過ごせるよう、全ての児童の心に訴える指導をすること。

33 金曜日、C教諭とD教諭は二人が安心して登校できるよう学級の児童に手紙を書かせた。E教諭は
34 B男を指導し、素直に謝ること、後輩を守れる5年生になることを約束した。

35 この日の放課後、C教諭とD教諭は家庭訪問して手紙を渡し、同行したE教諭は、B男に指導した
36 内容と、B男が反省している様子、さらに学校の支援体制を説明し理解を求めた。母親は少し安心し
37 た様子で、土日をかけて子供たちと前向きに話をすると話した。

38 月曜日の朝、母親から二人が家を出たと電話があった。校門で出迎えたときには二人とも不安そう
39 にしていたが、周りの児童が優しく話しかけたことと、朝一番にE教諭と共にB男が謝ってくれたこ
40 とで、その後は笑顔で一日を過ごすことができた。

41 この日の放課後、再度、担任3名は家庭訪問し、二人の様子を確認して気持ちを聴き、今後も安心
42 して過ごせる学校づくりを約束した。帰校してから全教職員で今後も注意深く見守り、支援を継続し
43 ていくことを確認した。

課題別研修

ー不登校防止パッケージ H28事例ー

○以下の語は（ ）内を意味する
ネットゲーム（インターネット上のゲーム）
SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）
SC（スクールカウンセラー）

不登校事例（中学校）

1 A男（2年生）は、1年生の時に11日の欠席の記録が残っている。欠席した日のほとんどは休日
2 の次の日で、夜遅くまでネットゲームをしたため、朝が起きられないということだった。家庭では学
3 校が休みの日だけゲームをしてもよい決まりになっており、平日のゲームの遅れを取り戻すために夜
4 遅くまでしているようだった。

5 学校でのA男は、明るく素直な性格で同級生の友達は多かった。学習の成績は中位あたりで、所属
6 しているサッカー部では、なんとかレギュラーとして頑張っていた。

7
8 ある日、学校で友達とゲームの話をしているとき、「A男ってさあ、休みの日にしかネットゲーム
9 できねえから、弱くて相手にならねーよなー。」と言われた。A男はその場では軽いいなすことがで
10 きたが、内心は疎外感を感じた。その日の夜、A男は、両親が寝静まってからこっそり寝室にゲーム
11 を持ち込み、友達とネットゲームに参加した。A男は罪悪感を感じていたが、友達から「A男やるじ
12 ゃーん！一緒に敵を倒してステージクリアしようぜ！」とコメントが入り、嬉しくてたまらなくなっ
13 った。

14 そんな日が数週間続いたある日の朝、A男はうっかりゲームを片付けないまま朝寝坊をしてしまっ
15 た。起こしに来た母親に、約束を破ってネットゲームをしていたことを、きつく叱られた上、友達を
16 非難され、付き合うのをやめるように言われた。A男は約束を破ったことはいけないとは思ったが、
17 友達のことを悪く言った母親に対して今までにない怒りを感じ、生まれて初めて母親に強く反抗した。
18 これまで学校の宿題は必ず済ませていたA男だったが、この日以降、家で勉強する様子が見られなく
19 なった。学校から帰宅しても母親と一切会話をせず、閉め切った部屋にこもってネットゲームをする
20 ようになった。心配して声をかけようとする母親に強い口調で悪態をつくなど母親との関係は悪化の
21 一途をたどり、徐々にA男は、昼夜が逆転し、学校を休むようになった。

22
23 母親は父親に相談したが、父親は「思春期特有の反抗期」程度の認識で時間が解決するだろうとA
24 男に関わりとしなかった。母親はどのように対応してよいか分からなくなった。家庭の問題と内心
25 では分かっていたが、母親は心配のあまり学校を訪問して担任のB教諭に相談した。

26
27 B教諭はこの件について、「不登校の兆候」と捉え、副担任、学年主任、生徒指導主事、養護教諭、
28 SC、教頭で今後の具体的な支援策について協議した。

29 協議の結果、担任はA男の気持ちをしっかり聴くことを通して、生活リズムを立て直すよう支援す
30 ること、母親には学校での支援に合わせて健全な生活に戻れるよう協力をお願いすること、そして養
31 護教諭はA男の身体的なケア、SCはA男の精神的なケアを分担することにした。

32 さらに、学年主任は生徒指導主事と相談し、家庭における生活のあり方や、ネットゲームを含めた
33 SNSとの適切な付き合い方やネット依存の危険性について、全クラスで指導ができるよう教材を整
34 え、各学年に授業の実施を依頼した。

35 また、この件はA男に限らず誰にでも陥る可能性があり、保護者との連携なしに指導は難しいと考
36 えた生徒指導主事は、学年PTA集会を開催してSNSの実態の説明と、学校の指導内容について全
37 保護者に協力を依頼することを提案した。そして、学年主任は管理職の承認を経て、学年PTA集会
38 を開催することを決定した。

課題別研修

－不登校防止パッケージ H28事例－

不登校事例（高等学校）

○以下の語は（ ）内を意味する
SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）
スマホ（スマートフォン）
アプリ（アプリケーションソフト）
HR（ホームルーム）

1 普通科に通っているA男は、1年生の時には学年で中位の成績で、テニス部に所属して頑張っている生徒であった。大学進学を希望しており、進学先でもテニス続けるつもりでいた。

2 父親は単身赴任で、家に帰ってくるのは月に1回程度なので、日頃は年の離れた小学4年生の弟と母親の3人で暮らしていた。母親は普段、A男より弟の世話が中心となっていた。

3
4
5
6 A男は2年生の5月、練習試合でケガをして1週間ほど自宅で療養したことがあった。もともと友達が多い方だったが、この時期にSNSを介して、さらに友達が増えていった。学校ではほぼ全員がスマホを所有しており、無料通信アプリを介して多くのグループができていた。学校内でのスマホ等の使用については“学校敷地内では使用禁止”とルールが決められていたが、授業の間や昼休みの使用については黙認されていた。

7
8
9
10
11 A男は数あるグループのうち、HRグループ、HR男子グループ、学年グループ、部活動グループ、部活動同級生グループに加えて、同じ出身中学校グループ、趣味音楽グループ等々、直接会ったことのない人が所属するグループにも登録していた。

12
13
14 A男は、時間を問わず飛び交うグループ内のメッセージを確認して、自分に関わるメッセージにコメントを返すことに時間を費やすことが増えていった。A男自身、コメントを返すことに多少うんざりしていたが、グループから外されるのではないかという思いから、こまめに返し続けていた。登校するようになってからもケガの治りが遅かったため、前ほど部活動に対する意欲がなくなっていた。

15
16
17
18
19 1学期の期末考査を前に、担任との面談が実施された。その中で、2年生になってから成績が下がってきていることを指摘され、SNSのやり取りが少々鬱陶しいことをもらした。担任からは、ケガの様子の確認とあわせて部活動に参加することを促され、「スマホと上手に付き合うように。」と指導されて面談を終えた。

20
21
22
23 しかし、A男は期末考査中、煩わしいと思いながらもSNSのやりとりを止められず、結果、大きく順位を下げてしまった。学校では夏休み後半も全員対象の補習が実施されていたが、A男は、1日も参加することができず、2学期を迎えても登校できなかった。

24
25
26
27 9月に入って数日経ったある日、担任は母親からA男がスマホを手放すことができず、昼夜が逆転して登校できなくなっていると相談を受けた。担任は、学年主任に相談し、副担任、教育相談課、養護教諭と状況の確認をして対応を協議した。協議の結果、担任と副担任が家庭訪問をしてA男の悩みをしっかりと聴き、学校に来ることができなくなった背景を理解すること、そして、学力の問題については担任、部活動については顧問、体調面については養護教諭、心の問題については教育相談担当、母親の相談には担任と学年主任が分担をして関わることになった。

28
29
30
31 A男は担任等と繰り返し話をする中で、SNSの使用時間が減り、生活のリズムが戻った。そして、9月下旬から徐々に登校することができるようになってきた。

32
33
34
35 養護教諭はA男に限らず、生活リズムの乱れ、体調不良を訴える生徒の多くに、スマホの上手な使い方ができていない状況があることを全職員に説明し、スマホや生活実態についてのアンケートを実施して、結果を基に全てのクラスで「スマホ等との上手な付き合い方」について考える時間を設けることにした。

